

みんなで人権を考える「つなぐ」 TUNAGU II

そのだ ひさこ

「TUNAGU II」とは

人と人、心と心をつなぐ、世界とつなぐ—人権尊重のまちづくりの一環として、さまざまな人権問題について市民の皆さんと共に考えます。

15部のテーマの「原爆の図」

今年には戦後77年目にあたる。今も東欧では、核使用をちらつかせ侵略戦争が続いている。日本は、世界唯一の被爆国として核軍縮・核廃絶に大きな役割を果たさなければならぬのではないか。

世界中に膨大な「核」が保有されている現在、原爆投下から3日目に広島に入り、自らも肉親を失いながら救出活動を続け、二次被ばくをした画家夫婦、丸木位里と丸木俊のことは忘れられない。

投下から3年後、「私たちは何をすべきか?」原爆を描こう! 画家なのだから」と二人は絵筆をとる。以来、「原爆の図」15連作の完成まで、30余年「原爆」を描き続ける。縦1・8m×横2・7mの図が15部、膨大な図である。

その15部のテーマのいくつかを紹介したい。

第一部「ゆうれい」:一瞬にして、衣服は燃えおち、皮膚は溶けたまま垂れ下がって、手をなかば挙げた状態でまるで幽霊のように歩いている人々の図。第二部「火」:ピカッと青白く強い光、人類が経験したことのない激しい衝撃、メラメラと燃え上がった炎にのみこまれた人々の図。第三部「水」:「水、水」と燃える炎を逃れて、水を求めてさまよいつながり、川までやっとなどつづき、乳をのませようとして我が子が死んでい

ることを知った母親の図など。第五部「少女」:建物疎開の手伝いに動員されていた子どもたちが川の流れに沿って、頭を並べて、るるいと連なり死んでいる図。

そして、第十三部の「米兵捕虜の死」では、日本人だけではなく、アメリカ人捕虜の被爆、日本人が虐殺した広島米兵捕虜の死など、加害側の被害も描かれている。また、第十四部の「からす」には、風に飛ばされているチマ・チョゴリが描かれており、とり残されている死体をカラスがついついでいる図では、韓国・朝鮮人差別の問題が提起されている。さらに、第十五部の「長崎」では、倒壊した浦上教会の天主堂を中心に死者が輪になって延々と広がっている図など。

総長40mをこす膨大な絵である「原爆の図」は世界をまわって展示され、二人はやがて、1995年ノーベル平和賞候補になった。他にも「水俣の図」、「沖縄戦の図」、「アウシュビッツ図」など、人類の惨劇、死者・死体を生涯にわたって描きつづけた。

命と平和の大切さを訴えればこそ!

二人が亡くなられて20年余がすぎた。今もなお二人が精魂込めて描かれた数々の作品は、平和な世界の確立やその永続に強く警鐘を鳴らしている!

問 教育政策課

10月21日は、国際反戦デー

今年には、沖縄復帰50周年の年でもあります。今年の沖縄慰霊の日(6月23日)の式典で、小学2年生の徳元穂菜さんが「こわいをして、へいわがわかった」と平和の詩を朗読しました。徳元さんは、多くの人々が亡くなった沖縄戦の絵を見て不安になり、抱きついた母親のあたたかさに「へいわ」を感じ、平和を守り続けたいという思いを詩に表したそうです。

詩の終わりには「せんそうがこわいから、へいわをつかみたくずっとポケットにいれてもっておこわいように、わすれないように、こわいをして、へいわがわかった」とつづられています。

10月21日は国際反戦デーです。命と平和について自分なりに振り返ってみることも大切です。

筑紫野市人権尊重の
まちづくりスローガン

自分が人からされたり、
言われたりして、
いやなことは、
自分は人にしない、言わない

平成29年度筑紫野市総合教育会議にて、子どもにも大人にも理解でき、実践に移せるスローガンとして決議されました。